



1.

湯川秀樹という人物は、第2次大戦後の日本社会において、一条の光明のような存在だったにちがいない。はじめての日本からのノーベル賞受賞は、敗戦に打ちひしがれた日本を、どれほど勇気づけたことか¹⁾。

その偉大な存在の学問研究の足跡をうかがえる資料が、英文で Yukawa と綴りのはじまる研究所、すなわち京都大学基礎物理学研究所 Yukawa Institute for Theoretical Physics に保存されている。本書は、その資料(以下「湯川資料」)を利用するための検索手段だ。

その検索手段(資料目録)は、もともと1冊の本ではなかった。これまで『素粒子論研究』という学術雑誌へ断続的に連載されてきた資料目録と関連記事をまとめなおしたものである。その契機は、湯川秀樹・朝永振一郎の2人の物理学者の生誕百年記念であろう。

2005世界物理年の日本委員会の提案により「2007年を湯川秀樹博士生誕百年記念年とする」ことが、第33回ユネスコ総会で採択され、2007年は国際湯川年となった²⁾。本書の発行年の由来は、ここにあらう。2006年3月下旬から2007年5月末にかけて、記念展示がおこ

なわれたことも記憶に新しい。「素粒子の世界を拓く：湯川秀樹・朝永振一郎生誕百年」と題して、国立科学博物館、筑波大学、京都大学、大阪大学の各所を巡回した。ひろく一般に業績が紹介されただけでなく、物理学の世界でも回顧され学説的に注目されたはずである。関係の歴史資料の利用が増えること、また実は未整理の資料がある現状を知ってもらうことをも想定し、1冊の資料目録に(再)公刊したものと推測する。

2.

本書の目次を示しておく。

まえがき

史料目録の解説

京都大学基礎物理学研究所湯川記念館史料室内規

京都大学基礎物理学研究所湯川記念館史料室利用規則

YHAL Resources Hideki Yukawa (I) — (VIII)

湯川秀樹全著作 version 3

付録1 湯川記念館史料室私記 河辺六男・小沼通二

付録2 湯川記念館史料室委員会のこれまでの委員

索引

『素粒子論研究』には、もともとの資料目録が、1998年まで9回(ⅦのほかⅧ続があるため)連載され、1999年の全著作の記事が公表された。またIの収録巻号には、本書で「付録1」とされた「湯川記念館史料室私記」(以下「史料室私記」)も掲載された。Iと「史料室私記」は、その初出が1982年である。「まえがき」には、2000年の死の直前まで湯川資料の保存に尽力した河辺六男氏の功績にふれられている。

資料目録の本文は、およそ利用申請書・写真複写願・分類体系・略語一覧(いずれも英文)からはじまる。それらの書式・内容は、すこしずつ変化するが、基本的には変わらない。Ⅲから「放談室」という記事種に収められ、Ⅶには分類にかんする日本語の説明

「YHAL コード番号配分表」がある。

資料目録本文の記載事項は、(a)分類記号・番号、(b)資料番号、(c)資料種別記号・番号、(d)略号注記、(e)標題・内容摘記等、(f)数量、の一式で、これを罫のない表のかたちであらわしている。(d)は、出現しないこともある。(a)～(c)は、桁数を3文字にそろえてある。(b)の資料番号は、(a)→(c)の秩序にしたがって振りなおされ、基本的に2桁目からを使用し、3桁目は資料が細分されるばあいのために予約してある(枝番号のような位置にある)。つまり、(a)～(c)の一式で、資料を識別するように設計されている。

3.

公文書や、団体・個人・家の書類のなかでもとくに古文書の、資料目録を見慣れている人たちにとっては、予想しないような内容を見ることができる。たとえば、英数字の斜字体・太字などの表現はありえるとして、標題が数式だけ、という資料もある。もちろん説明記述によって内容標題を与えればよいとの声はあろうが、じっさいに資料に数式しか記されていない紙片を目の前にして、その数式がなにが即時に解読することは、おそらく容易ではない。この一例だけからも、資料管理専門者にながが必要か、かんがえさせられる。

湯川資料の整理・保存の実務にたずさわった人たちは、物理学の研究者でもあったので、前述の資料内容の理解にかかわる問題は深刻ではなかったかもしれない。しかし、かわりにアーカイブズとして資料を保存することについては、相当な苦労があった。その経緯は、「史料室私記」にくわしい。本書のなかで、注目すべき部分でもある。「史料目録の解説」に加えて、保存・整理の過程を記す解題となっている。

そもそも本書の対象とする資料群名が明示されていない(“YHAL Resources Hideki Yukawa”とは記されている)とか、item レベルやそのなかの件名目録に相当する記述データが中心になっているとか、ビニール袋

に入れて保存しているとか、ゼロックスコピーで複写をとっているとか、現在のアーカイブズ管理の目からみて多くの問題点をあげつらい技術的に批判することはたやすい。しかし、である。1980年前後に、日本のアーカイブズの世界、文書館界は、湯川記念館の資料に注目し助言していたのか。

いわゆる戦後の史料保存運動と無縁に、当時の物理学・科学史学の有志が努力してきた。それを「史料室私記」から読み取れるのだ。同時に、じつは欧米のアーカイブズの状況や知識の紹介として、重要な位置を持っている。国文学研究資料館史料館員がアーカイブズの国際的動向を紹介しはじめた時期よりも早く、両者に影響関係はない³⁾。「史料室私記」の「欧米 Archives 回覧実記」「ARCHIVIST 手習い」は、物理学関係の研究所内にあるアーカイブズの歴訪の経験や、保存・整理の方針・作業の内容を提示する。明治期の使節団を想起させる表現も興味深い。その海外から学んだ手法は、当時の日本に流布していた図書館式の分類整理の方法に影響を受けていないと推測できる。先にふれた YHAL コード番号の例は、レコードマネジメントの手法に近縁性をみる。なにより「〔整理則 I〕原著者が置いた資料の順序を絶対に乱さず、かつ記録する」と、はっきり掲げた実践例は、当時に多くはみられないであろう。

そのかわり、その後の湯川記念館史料室の活動は、孤独になった。さらに2000年以後、整理・保存の作業は、停止したようである。ほとんど日本の文書館界と交流がなかったのは、いかにも惜しい。

4.

日本のアーカイブズの世界にとって、本書の示唆するところは大きい。たとえば、湯川資料の整理に際し、ノーベル賞受賞にかかわる中間子論関係資料に集中する戦略や、実物すべての公開ができない資料を編集して提示する手法は、限られた資源しかない環境下で

の現実的対応の実例といえる。指摘すべきでは数多あるが、紙幅が尽きたようだ。

評者は、本書の紹介が本書への注目にとどまらず、湯川記念館史料室はじめ科学・技術のアーカイブズへの注目へ結びつくこと、を願っている。湯川記念館史料室ほか関係のアーカイブズへ、ぜひ足を運んで実見し、アーカイブズの多様さを体験していただきたい。公文書や古文書以外のアーカイブズをあつかう取り組みを、これからは孤独にしてはならない。日本のアーカイブズの世界の協力と議論の深化を期待して、筆を措くことにする。

〔参考文献〕

湯川・朝永生誕百年企画展委員会（湯川朝永展委）編。素粒子の世界を拓く：湯川秀樹・朝永振一郎のひと時代。京都：京都大学学術出版会，2006年，（学術選書017）。

九後太一。2005世界物理年によせて：アインシュタインから湯川・朝永へ。日本物理学会誌。Vol.61, No.1, 2006年。

URL: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jps/jps/topics/wyp/wyp-2006-01.html>

坂東昌子。「湯川精神—私の思うこと」。一般教育論集（愛知大学一般教育研究室）。第33号，2007年。

田中正。湯川秀樹とアインシュタイン：戦争と科学の世紀を生きた科学者の平和思想。東京：岩波書店，2008年。

安澤秀一。史料館・文書館学への道：記録・文書をどう残すか。東京：吉川弘文館，1985年。

（関連リンク・抄）

京都大学基礎物理学研究所湯川記念館史料室。

http://www.yukawa.kyoto-u.ac.jp/contents/about_us/yukawa/index.html

※本書は、同研究所のサイトから入手可能。記念展示記事（京大総合博物館「素粒子の世界を拓く：湯川秀樹・朝永振一郎生誕百年」）。

<http://www.kyoto-u.ac.jp/yt100/kikakuten.htm>
筑波大学朝永記念室。

<http://tomonaga.tsukuba.ac.jp/pub/event/exhibition.htm>

〔注〕

1) こういった回想は、受賞時に生きていた人たちの談として、しばしば登場しよう。湯川朝永展委2006も、冒頭に回想を引用する。

2) 九後2006に紹介があり、ユネスコのつぎの会議資料をも参照のこと：UNESCO. General Conference; 33rd session, Paris 2005. (The General Conference, having examined document 33 C/12, ... 2 Decides ... 33.) 100th anniversary of the birth of Hideki Yukawa (Japan). URL: <http://unesdoc.unesco.org/images/0014/001411/141144e.pdf>

3) ふつう文書館の人たちは『素粒子論研究』を参照しないから、影響関係がないことは当然だが、接点は皆無ではない。安澤1985は、序章5「科学史・技術史料の保存と利用」（初出1982年10月）のなかで、「京都大学基礎物理学研究所に湯川アーカイブズが架蔵され」ていることに言及する。これは、1982年3月30日の日本物理学会物理学史分科シンポジウムで、「史料室私記」の著者の1人、小沼通二氏と同じく、安澤秀一氏も報告をしていることに由来しよう。

〔謝辞〕

本稿は、評者が研究分担者として参加する科学研究費補助金・基盤研究(A)「湯川・朝永・坂田記念史料の整理および史料記述データベースの整備」（研究代表者：高岩義信〔筑波技術大学〕・課題番号：20240073，平成20年度～平成22年度〔2008/2011〕）の研究成果の一部である。執筆にあたって、高岩先生、小沼先生には、物理学史の動向や湯川資料保存・整理の経緯にかんして、九後先生、坂東先生、田中先生には、湯川資料の理解にかんして、種々のご教示をいただいた。安澤先生には、1980年前後のアーカイブズの世界の状況について、ご教示いただいた。お世話になりました関係の先生方には、この場を借りて感謝申し上げたい。ありがとうございました。

〔京都大学研究資源アーカイブ 五島敏芳〕